〔研究ノート〕

芥川龍之介「秋」考察
――〈松林〉のある「大阪の郊外」について

鷲　﨑　秀　一

Ⅰ

東京と大阪の二つの郊外を舞台にした芥川龍之介の「秋」(『中央公論』，大正９・４）は，作風の変化[1]，作者の並々ならぬ自信[2]，読みの多様性[3]からすでに多くの先行研究がある作品だが，全集の注釈等においても，まだ詳らかにされていない事柄がある。それは，作中，重要な場面でたびたび描かれ，読後の印象にも強く残る〈松林[4]〉についてである。

・信子はこの重苦しさを避ける為に，大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に当つた日の光が，だんだん黄ばんだ暮方の色に変つて行くのを眺めながら。（本文「一」より）

・しかし机には向ふにしても，思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頬杖をついて，炎天の松林の蝉の声に，我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。（本文「二」より）

・そんな文句を書いてゐる内に，（彼女には何故かわからなかつたが，）筆の渋る事も再三あつた。すると彼女は眼を挙げて，必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に，簇々と蒼黒く茂つてゐた。（本文「二」より）

・照子はそれが可笑しいと云つて，子供のやうな笑ひ声を立てた。信子はかう云ふ食卓の空気にも，遠い松林の中にある，寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにゐられなかつた。（本文「三」より）

このように，「大阪の郊外」で暮らす主人公信子の生活（本文「一」・「二」）にて，陰鬱な視線の先にあるのは〈松林〉であり，また，久しぶりの帰京（本文「三」）にもかかわらず，ふと思い出すのも，やはりこの〈松林〉なのである。

そもそも，この〈松林〉はどこにある松林だということが示唆されていたのであろうか。妹夫婦が暮らす東京の家については，「郊外渋谷，代々木，世田ヶ谷，中野等の新開地」との注解[5]も見られるが，信子夫婦が暮らす「大阪の郊外」については，注さえ存在しない。次の引用が，作中にて，その〈松林〉が見える「大阪の郊外」について言及される場面である。

> 信子はその間に大阪の郊外へ，幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも最も閑静な松林にあつた。松脂の匂と日の光と，――それが何時でも夫の留守は，二階建の新しい借家の中に，活き活きした沈黙を領してゐた。

もちろん，この情報のみにて，その場所を特定することは不可能である。だが，直接的に指し示す言葉はなくても，同時代の読者にしてみれば，他の情報から類推できた可能性はないだろうか。間接的な情報や時代背景から勘案して，ある地域が浮かび上がっていた可能性である。作中で十分匂わされていれば，あえて明言されるまでもないことである。

作品の舞台について検討してみることは単に作品研究の一環にとどまらず，ときにその場所のもつ歴史性が新たな読解への道を拓いたり，また文学散歩という形で地域活性につながったりする場合もある。むろん，芥川研究の文脈においても，これまでの盲点を補える可能性がある。というのも，「秋」執筆時の芥川[6]は，大阪毎日新聞の客員社員という待遇であるのだが，同紙に掲載された作品についての研究[7]はあっ

無断転載禁止

ても，同社員時代の芥川という枠組みから捉え直すという試みはされていない。江戸っ子のイメージの強い芥川ではあるが，この時期においては，意識は確実に大阪に向いている。また，芥川にとっては，教職を辞して，専業作家としての歩みを始めた時期でもある。書かれた作品群には，内に秘めた決意のほどを窺うことができよう。

本稿では，小説「秋」から読み取れる情報と同時代資料とを照合することによって，〈松林〉のある「大阪の郊外」は，どのあたりが示唆されていたのかを推し測ってみたい。なお，「秋」の作品論については，別稿を用意してある。

Ⅱ

まずは，信子夫婦が「大阪の郊外」で暮らすようになる経緯について確認しておきたい。次は，本文「一」からの引用である。

> 所が学校を卒業すると，信子は彼等の予期に反して，大阪の或商事会社へ近頃勤務する事になつた，高商出身の青年と，突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから，新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたものの話によると，信子は何時もと変りなく，晴れ晴れした微笑を浮べながら，ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

このとおり，「高商（※現一橋大学）出身の」夫が，「大阪の或商事会社へ近頃勤務する事になつた」ために，「大阪の郊外」に居を構えたとされる。この成り行きについて，一見すると不審な点はないように思われる。だが，彼らが，東京から移住してきたことを考えると，気がかりな点がないわけではない。というのも，なぜ彼らは，通勤にも生活にも便利な大阪市内でなく，わざわざ「大阪の郊外」に居を構えたのであろうか。その背景には，なにか事情が存在したのであろうか。

そもそも当時の感覚で，「大阪の郊外」とは，どのあたりが該当したのであろうか。

たとえば，明治44年８月号の『大阪経済雑誌』には「経済上よりの郊外生活観」という記事が掲載されており，そこには「大阪の郊外」と目される具体的な地域についての言及がある。

> 京阪線で香里以西，阪神線で香櫨園以東，箕宝線で池田市街以南，南海線で浜寺以北，これ等の沿線地帯は成程家賃が安かろう，空気も新鮮だらう，野菜類も根抜きの侭食膳に供へられやう，それに交通の利便があるから容易に通勤も出来やう，殊に新世帯の新婚夫婦などは其名の美しく詩的なのに満足も為やう，併し其実際はどうであらうか。（※傍線は引用者による。）

このとおり，本資料では，大阪の中心部から直線距離で約20km圏の地域が該当している。よって，和歌山や奈良の付近まで行くと，いわゆる「大阪の郊外」というには遠く，またさほど遠くなくても，たとえば京都や神戸のように，大阪とは異なる歴史をもつ都市の文化圏に入ると，「大阪の郊外」とは見なされなかったと考えられる。

別の資料でも検証してみる。たとえば「大阪付近の郊外生活地」という記事が掲載されている書籍[8]では，北は箕有電車沿線（※現阪急宝塚線）で池田，西は阪神電車で芦屋，南は南海本線で浜寺周辺が「大阪付近の郊外」の例として挙げられ，先の資料とほぼ同様の地理感覚であった。

その中で，松林が思い浮かぶ地域となると，ある程度絞り込むことができる。というのも，大阪湾一帯は古来より松が植生する地域であって，その中には名高い浜や海岸がいくつも存在する。とくに有名なのは，かつて歌枕にも挙げられた高師浜（大阪府高石市）で，先の資料でいうところの浜寺である。この地域の松林は，近代を迎えた頃には伐採計画が進んでいたが，たまたま通りかかった大久保利通が惜しんで，それが保全されたという逸話[9]も残されている。そして，そこから北へ約10km，つまりそれだけ

無断転載禁止

大阪の中心地には近づくものの，そこには住吉大社がある。この近辺も「住吉の松」で知られている。

かように，大阪湾の南岸に松原が広がる一方で，湾の北西側，つまり阪神間もまた，古歌[10]に詠じられた松原が有名であった。その範囲は，武庫川以西から，白砂青松で知られた舞子を越え，明石の先まで続く。明治の終わりから大正の初めにかけて，一時期，大阪府池田市に在住していた岩野泡鳴は，次のような記述を残している。

> 郊外に出ると，東京よりは大阪の方がいゝところがある。（中略）大阪に於ける浜寺の海水浴，住吉の神社，箕面の紅葉，宝塚の温泉，香炉園の松原，香里園の松茸等の便利で眺めがいゝのとは比べ物にならない……[11]。

この「香炉園」とは，もちろん芦屋と西宮の間に位置する香櫨園のことである。大阪の郊外に関する着想で，何の気なしに，阪神間の松原が挙げられている点は注目に値しよう。さらに興味深いことに，この地域は，同時代作品の舞台にもなっている。徳田秋声「蒼白い月」（『サンエス』，大正９・７）は，東京在住の「私」が，養子の兄（桂三郎）とその妻に面会した際の心境を描いた随筆風の作品である。冒頭は次のように始まる。

> 或晩方私は桂三郎と一緒に，その，海岸の山の手の方を少し散歩して見た。
>
> そこは大阪と神戸とのあひだにある美しい海岸の別荘地で，白砂青松と言つた明るい新開の別荘地であつた。私はしばらく大阪の町の煤煙を浴びつゝ，落着のない日を送つてゐた

その地は「白砂青松」といったイメージから語り起こされる一方，「私」が暮らしていた「大阪の町」は，まず「煤煙」が挙げられ，環境面で対照的な関係にあることが示唆される。実際，本文では，その地が，いかに理想的な郊外居住地であるかが語り続けられる。

> この海岸も，煤煙の都が必然展げて行かなければならぬ郊外の別荘地の一つであつた。北方の大阪から神戸兵庫を経て，須磨の海岸あたりまで延長して行つてゐる阪神市民に温和で健やかな空気と，青々した山や海の眺めと，新鮮な食料とで，彼等の休息と慰安を与へる新しい住宅地の一つであつた。

そして，この地で暮らす桂三郎は，「毎日大阪の方へ通勤している」とされる。つまり，彼は職住分離という，当時としては新しいライフスタイルを実践している会社員なのである。かように本作は，当時の阪神地域在住者の生活を窺わせる点でも資料的価値の高い作品であるが，松林に囲まれるその地の様子についても，詳細に描写されている。

> 道路の側の崖のうへに，黝ずんだ松で押包んだやうな新築の家が到るところに，ちらほら見えた。塀や門構は，関西特有の瀟洒なものばかりであつた。
>
> 「こちらへ行つてみませう。」桂三郎は暗い松原蔭の道へと入つて行つた。そして其処にも，まだ木香のするやうな借家などが，次ぎ〳〵にお茶屋か何かのやうな意気造りな門に，電燈を掲げてゐた。
>
> 私たちは白い河原のほとりへ出て来た。そこからは青い松原をすかして，二三分ごとに出てゆく電車が，美しい電灯に飾られて，間断なしに通つてゆくのが望まれた。

見てのとおり，この地域の松は，いたるところに植生しており，街の景観として不可欠な存在であった。当時の地図[12]で確認すると，西宮市内の多くはまだ水田だが，各駅周辺には集落が広がり，その付近には針葉樹林が散見する。むろん，海沿いと川沿いともなれば，現在同様，松林で敷き詰められている。この作品には，一郊外に過ぎなかった芦屋が，徐々に高級住宅街へと変貌を遂げる，その過程を窺うことができる一方で，「木香のするような借家」が存在したことも描かれていた。

ここで「秋」に立ち返り，あらためて彼らの住まいという点に着目してみる。彼らの住んでい

無断転載禁止

る家もまた「二階建の新しい借家」であった。

信子はその間に大阪の郊外へ，幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも最も閑静な松林にあつた。松脂の匂と日の光と，――それが何時でも夫の留守は，二階建の新しい借家の中に，活き活きした沈黙を領してゐた。

大正時代だと，借家自体は珍しいものではなく，都市部にはかなり存在した。だが，当時の大阪近郊の住宅事情を記した書籍[13]を参照すると，一口に貸家と言っても，地域によって質量ともに差があったことが記されている。

○西之宮（にしのみや）

香櫨園付近は山に近く海に近く樹木も多く土地もよし，然し家賃もまた高く，その代りに造作もよし，半季一年の契約で借りれば安く借りられる，物価は安からず大阪より電車代往復二十一銭。

（中略）

○住吉（すみよし）

高灯篭付近に新築の貸家が櫛比してゐるが，家賃は十二三円以上，便利よからず水悪く，土地低し。

○浜寺（はまでら）

貸家と云ふものは殆んど無い，海岸に貸別荘はあるが随分高く，単に郊外居住者には不適であるのみか物価も高い。

これらはおそらく，一般的な読者が知りえる情報ではないので，あくまで傍証の一つでしかないが，本資料では，大阪湾南岸に位置する住吉には「新築の貸家が櫛比してゐ」て，浜寺には「貸家と云ふものは殆んど無い」とされている。大阪の中心部に近い住吉に貸家が多いのは当然だが，問題は浜寺である。浜寺とて，難波までなら電車で一本である。海水浴場の開業以降，急速に観光地化が進んだことで，「郊外居住者には不適」と見なされたのであろうか。もし，この情報のとおりだとすると，住吉は「秋」の舞台としてあり得るが，「貸家と云ふものは殆んど無い」浜寺は，該当しないことになる。ただ，住吉も，大和川を越えて，大阪市内に入ってしまうのは，郊外として気にかかるところである。

一方で，大阪湾西岸の香櫨園付近も，明治三十八年の阪神電車開業以降，急速に沿線開発が進んでおり，先の資料にあるとおり，大阪での通勤のために移住してくる人々の受け皿として貸家が存在した。なお，この引用部には，次のような前段がある。

郊外生活と云ふからには何よりも先づ市内との便利のよき地を選ばねばならぬ，まづ大阪に居住して新しく郊外生活に入らんとする人々の為めに，電車の便のある付近の郊外地の家賃や生活程度一通りを紹介しやうと思ふ，あらたに大阪へ来やうとする人も，家賃の高い物価のやすからぬ市内に家を構へるよりも郊外に家を求めた方が得策であらう，夫等の人々の為めにも何かの便利になれば結構である。

思えば「秋」の信子たちも，まさに「まづ大阪に居住して新しく郊外生活に入らんとする人々」であり，「あらたに大阪へ来やうとする人」であった。東京から移住するにあたって，「何よりも先づ市内との便利のよき地を選ばねばならぬ」とも考えたであろうし，もとより彼らは新婚である。先に引用した「経済上よりの郊外生活観」という記事には，郊外について「殊に新世帯の新婚夫婦などは其名の美しく詩的なのに満足も為やう」との記述も見え，実態はさておき，郊外が当時の新婚夫婦の理想を具現化する場所と考えられていた節も見られた。かような情報が流布する中，新婚の信子夫婦が，下調べもなく関西に移住してきたとは考えにくいのである。

ここで，先に立てた問題設定に立ち戻る。なぜ彼らは通勤にも生活にも便利な大阪市内ではなく，「大阪の郊外」を選んだのか。その背景には，やはり当時の大阪に付いて回っていたネガティブなイメージが影を落としていたのではあるまいか。先に「蒼白い月」でも見たとおり，大阪は，いわゆる「煙の都」というイメージが定着していた。

無断転載禁止

・『煙の都』とは大阪の代名詞である。大阪は東洋のマンチェスターである。（略）大阪の死亡率の多いのは煙の為であると云ふ人がある。成程大阪は煙の為に割合多くの人を失ひつゝあるかも知れぬ。（略）大阪の空は煙に焦されて居るが，神戸の空は青く澄んで居る。（栗山潮水「関西十市瞥見記」（『実業之世界』，明治45・4））

・大阪を煤煙の都，商賈の華城と唱ふるだけ大阪市は郊外接続地と共に工場の集中及び専集状態を呈し来り，一方市内の家屋と云ふ家屋は殆んど商賈と事務所に化せんとしてゐる。されば多くの住民は騒然たる煤の都から離れて，郊外の空気好く水清き田園都市に居を移すやうになつた。（無署名「大阪の郊外と八達の軌道（一）」（『実業の世界』，大正６・５））

かように環境悪化のイメージが先行している大阪市内に，新婚夫婦の彼らが居を構えなかったのは，当時としては，その理由を推察しうることであった。逆に，立地的に比較対象とされがちな阪神間は，空気も水もよいという環境面でのメリットに加え，待たずに乗れる阪神電車の開通によって，大阪へのアクセスが向上しており，当時から魅力的な郊外住宅地として喧伝されていた。近代阪神地域における歴史と文化について，住宅という観点から調査した坂本勝比古は，次のように述べている。

阪神電鉄は，郊外住宅地経営にさきがけ明治四十一年に『市外居住のすすめ』を刊行している。専務取締役・今西林三郎の呼びかけに応じて，当時の多くの医療関係者が講演あるいは論述したものを取りまとめたものである。「空気の善悪と市外居住の可否」「虚弱者は須らく市外居住を断行せよ」「長生の基礎は市外生活にあり」などの十四の小稿からなっている。郊外居住の優れた点として論者は共通して健康に良いことと，雅趣に富んでいることを挙げているが，健康面についての記述がとくに強調されている。その背景には，当時の大阪の環境悪化とともに明治三十八年から四十年末にかけては一時鳴りをひそめていたペストが大阪市民をふたたび脅かし，六百人近い死者を出していたこともあった。今西林三郎が医療関係者に呼びかけたこと自体，健康面からの訴えかけが当時においては最も説得力をもつと考えていたことを示している。[14]

このように，鉄道会社による沿線開発は盛んにそのメリットが謳われており，大正年間に入ると，箕面有馬電気軌道（※現阪急電鉄株式会社）は雑誌『山容水態』（大正元年）を，阪神電鉄は引用中にある『市外居住のすすめ』の後継誌に当たる『郊外生活』（大正３年）を発刊し，大阪市内での生活の不安を扇動する一方，自らが経営する私鉄沿線での生活，つまり「大阪の郊外」での生活を称揚するキャンペーンを張る。浜寺も住吉も特段悪い土地ではないのだが，阪神間の語られ方は他を凌駕するものがあった。かような動向から，「高商出身の青年」と「女子大学」卒の信子というエリート夫婦の住まいは，阪神間のどこかの松林付近にあったことが想像されたのではないだろうか。

むろん，イメージだけで結び付くのでなく，実際，「秋」本文には阪神間に住居があったことを想わせる言動も存在する。次は，信子夫妻の休日の様子が語られる場面である。

殊に夏の休暇中，舞子まで足を延した時には，同じ茶屋に来合せた夫の同僚たちに比べて見て，一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。

阪神間に居を構えていたとすれば，この「舞子まで足を延した」という表現は，きわめておさまりがよい。「秋」本文において，東京と大阪を除くと，唯一具体的な地名で挙げられている「舞子」は，まずその点で軽視できないのだが，舞子の位置は当時の阪神電鉄終点の神戸駅の，その延長上にある。また，信子の夫が，「大阪の或商事会社へ近頃勤務する事になつた」という事情も，阪神間に住居があったとする見方に利する。なぜなら，大阪にあった商社[15]のオフィ

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 56 No. 1

スは，当時から北浜や堂島エリアに集中していた。そこまでのアクセスを考えると，一本で通勤できる阪神電車は好都合である。以上の見地からも，彼らが「大阪の郊外」の阪神間に住んでいたことは推察されたと考えられる。

さらに，こうして見てくると，作品の構成面にも，興味深い仕掛けが施されていたように感じられる。というのも，本作が東京と大阪の，ともに郊外の比較となっていることは，すでに先行研究で指摘されていることだが，阪神間であったとすれば，さらに「山の手の或郊外」の「新開地」という点でも対称的となり，東京の妹夫婦との比較が際立つ形となるのである。

では，「秋」の「大阪の郊外」が具体的に鳴尾なのか，西宮なのか，香櫨園なのか，芦屋なのか，実際のところ，そこまで断ずることは難しい。ただ，いずれにせよ，これら阪神間の地域には，今でも変わらず松が植生している。「秋」の信子は，先行研究にて，感傷的な夢想家と言われるだけでなく，軽薄で見栄っ張りな女性と分析されることもしばしばだが，彼女の結婚には，次のような背景もあったとされる。

> まだ女学校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて，後家を立て通して来た母の手前も，さうは我儘を云はれない，複雑な事情もないではなかつた。

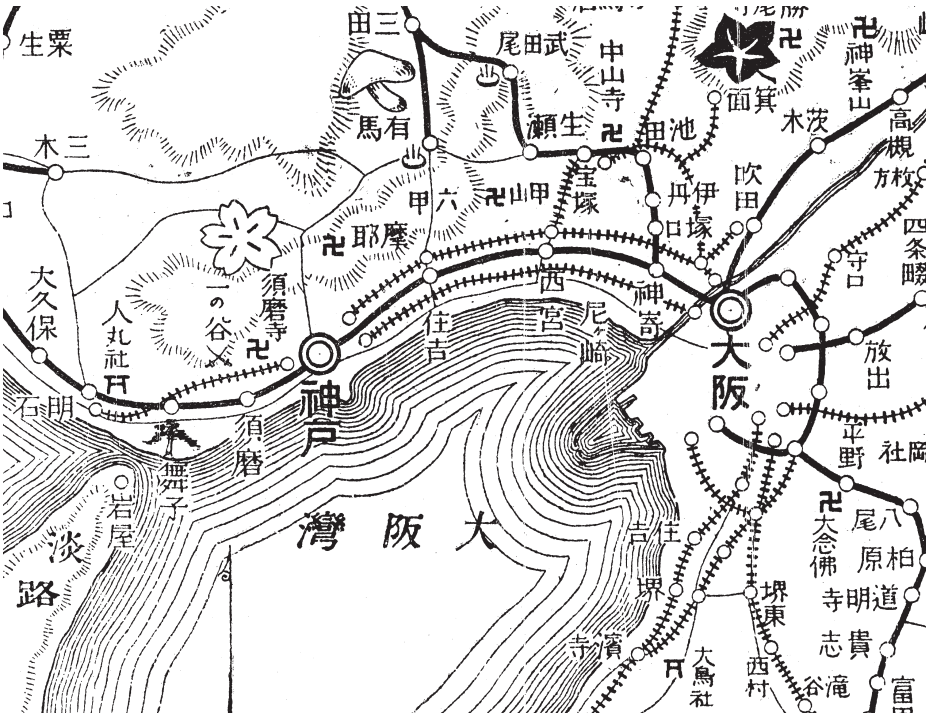
そして，東京を離れた信子は，かつての「気兼ねなく笑つたり話したりした」，そのようなありふれた日常を失ってしまった。

彼女が送ったであろう，「大阪の郊外」での寂しい暮らしを想いつつ，その松林を歩いてみると，彼女の陰鬱な視線の先に何があったのか，実際に感じ取ることができるのではないだろうか。

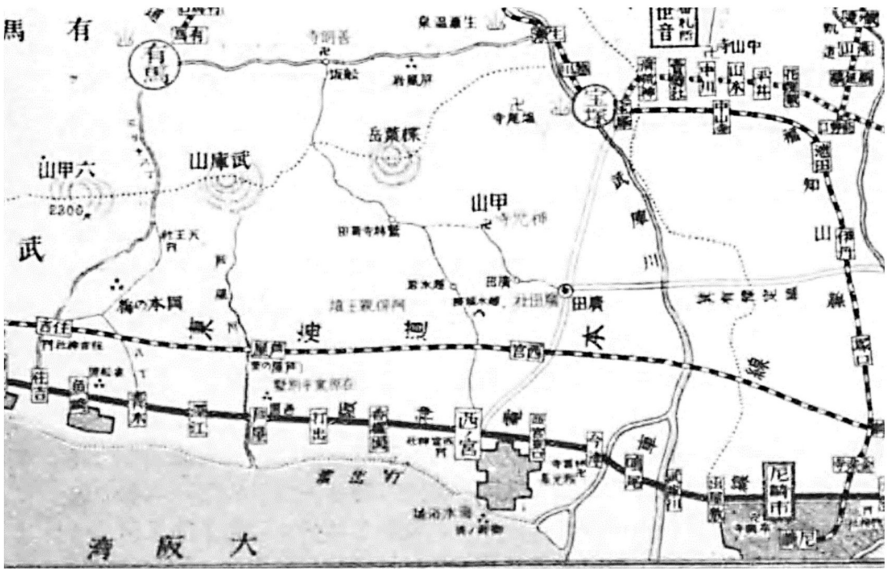
無断転載禁止

Oct. 2020　　芥川龍之介「秋」考察

参考



地図１　「近畿遊覧概図」（近畿遊覧社編『近畿遊覧一日がけと泊りがけ』（大正10・10）より抜粋）



地図２　「阪神付近名勝図」（炭谷傳次郎編『最新神戸市街新地図』（大正7･7，駸々堂旅行案内部）より抜粋）

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 56 No. 1

付記

「秋」本文の引用は，『中央公論』（大正９・４）に掲載された初出に拠った。また，旧字は新字に改め，ルビ・傍点は省略した。なお，地図については国立国会図書館デジタルコレクションから転載した。

注

1）久米正雄「続七月の文壇（二）」（『時事新報』，大正９年７月14日付）には，「「秋」で一転向を見せやうとした悧巧な此作者」とある。その変化の質については，先行研究で議論の焦点となっている。

2）たとえば，「或男「秋」の悪口を云つて来る貴様にはわからないのだと返事をする」（大正９年４月15日付，小島政二郎宛書簡）など複数の相手に，作品の出来や評価について書き送っている。

3）核心を伏せる語りによって，主人公信子をはじめ，登場人物たちの像が捉えづらく構成されている。先行研究の動向については，別稿「芥川龍之介「秋」論―「幸福」は〈松〉とともにあらず」にてまとめてある。

4）本稿では，同時代性を重視し，「秋」初出時に公刊されていない資料については論拠としない方針であるが，芥川の書簡には〈松林〉の中の家に関する言及がいくつか見えるので，参考までに本注で引用しておく。芥川の中では，「秋」執筆以前に，そのイメージの一端は形成されていたものと考えられる。

・今日鵠沼の和辻さんのうちへ行つたら松林の中にうちがあつて　そのうちの東側に書斎があつて　そこにモナ・リザの大きな額をかけて，その額の下で和辻さんが勉強してゐました　芸者のやうな奥さんと可愛い女の子が一人ゐて　みんな大へん愉快らしく見えます　ボクは何だかその静な家庭が羨しくなりました（大正６年５月31日付　塚本文宛書簡）

・昨日はどうもいろいろ御世話になりましたあとでいろいろ考へるとどうもその松林の中のうちの方がよくなつたのですが，それは実際ぢきに明きませうか（大正７年１月31日付　菅忠雄宛書簡）

5）『芥川龍之介全集　第六巻』（平成８・４，岩波書店）の注解には，次のとおりある。

・当時の「山の手の或郊外」の「新開地」としては「郊外渋谷，代々木，世田ヶ谷，中野等の新開地」（「東京朝日新聞」一九二〇年四月二日）がある。

6）「秋」執筆時での，芥川と大阪の接点は，薄田泣菫との縁にある。海軍学校教官から作家専従への転身を画策していた芥川は，大正７年になると，大阪毎日新聞社社員であった泣菫に入社を懇願し，まず社友待遇を得ている。この件で，当時の芥川は，泣菫と頻繁に書簡を交わしており，同年６月の江田島出張の際には，東京への帰路，大阪に立ち寄って面会を果たす。大正８年に泣菫が同社学芸部部長に昇進すると，芥川は出勤義務なしの客員社員としてさらに厚遇を受けることになる。同年５月の長崎旅行の帰りにも，芥川は同社を表敬訪問している。なお，泣菫は西宮市香櫨園に在住しており，芥川は，泣菫から関西の情報を得るだけでなく，この出張によって山陽本線に乗車し，阪神間の風景も実際に見ている。このときの見聞が，のちの「秋」の舞台設定に影響を及ぼしている可能性は高い。また，注４で述べたとおり，本稿では初出時に公刊されていない「秋」の未定稿（※葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』（昭和43・１，岩波書店））も論拠としない立場であるが，参考までに，そこには「彼等は阪神電車の沿線の松林の中に家をもつてゐた。彼等の生活は幸福だつた。」との記述が見えることを付言しておく。ただし，これは草稿とも別稿とも目される断片の一部に過ぎず，むろん定稿「秋」の同時代読者にとっては知るすべのない，つまり存在しない情報である。

7）篠崎美生子「「芥川」をつくったメディア―『大阪毎日新聞』の小説戦略―」（『恵泉女学園大学紀要』平成26・２）があるが，「秋」に関しての言及はない。

8）現代家政研究会編『研究実例貯金の出来る暮し方』（大正６・９，金成堂書店）

9）野田文六『近畿名所一日の遊覧』（大正７・４）には，次のとおりある。

此地明治の初年，里人等浜辺の古松を伐採せんとせしことありしが，今は故人なる大久保利通公偶ま此地を過りて其事を聞き。

音に聞く高師の浜の松が枝も　世の仇波は逃れざりけり

と一首の和歌を詠ぜしに里人等僅かに思ひ止り，爾来四十余年の今日其松によつて勝地と謳はれ遊園となりしは奇と云ふべし。

なお，大正５年７月26日付の『東京朝日新聞』に掲載された大庭柯公「浴衣かけ」という記事にも，同じ逸話が紹介されている。

廃藩置県忽々の知事様が「無用の老ぼれ松伐て薪に利用せよ」との一声の下に，無智な地方民の斧に過半伐り倒された処へ，故大久保内務卿が丁度通り合はされ，驚いて松共の為めに命乞ひをされて，漸く今の松林だけが生遺つた次第である。

10）たとえば，注９の野田文六『近畿名所一日の遊覧』（大正７・４）にて紹介されているものを引用すると，次のとおり。

浦さびてあはれ鳴尾の泊かな松風さへて千鳥なくなり（『老木集』）

あま乙女いさりたく火のおほくしてつぬの

無断転載禁止

松原おもほゆるかも（『万葉集』）

11）岩野泡鳴「大阪の進歩と東京の進歩」（『女子文壇』，明治45・4）。ちなみに，ここでは「浜寺の海水浴」も挙げられているが，打出（芦屋）の浜とともに，この地の海水浴場の開設に携わっていたのが大阪毎日新聞社であり，偶然ではあるが，ここで芥川ともつながっていく。なお，和田秀寿「阪神間の海辺」（『阪神間モダニズム』，平成９・10，淡交社）によれば，明治末の『大阪毎日新聞』には「南海の浜寺海水浴場とともに，北は打出，南は浜寺として「打出・浜寺海泳場記事」が連載され」，両海岸とも賑わっていた時期があり，当時の読者には，大阪湾一帯の松原が浮かびやすい下地があった。

12）「にしのみやデジタルアーカイブ」掲載の，大正時代の「二万分の一地形図＊西宮」にて確認。

13）注８と同じ。なお，本書の奥付には，大阪と東京の売捌所が併記されているが，発行者・印刷者・発行所の住所はすべて大阪市内であり，大阪一円の状況に明るい人物が著したものと考えられる。

14）坂本勝比古「郊外住宅地の形成」（『阪神間モダニズム』，平成９・10，淡交社）

15）たとえば，三井物産大阪支店，大阪北港本社（※現住友商事），伊藤糸店（※現伊藤忠商事）など。

（2020年７月３日掲載決定）

無断転載禁止